

1999 年

出版学校日本エディタースクール・上海出版印刷高等専科学校

日中出版教育校際学術交流会論文集

中国の出版学研究の現状と展望

施 勇 勤 (Shi Yong Qin)

中国の学术界の出版学に対する研究は、最初はその子分野ともいべき編集学の研究から始まり、今日にいたるまですでに 50 年の歴史をもつ。1949 年 3 月自由出版社発行の李次民『編集学』は、広東国民大学新聞学系叢書のなかの 1 冊であり、報道理論、編集者の地位・職務・条件、編集理論、編集の過程と方法について述べている。この著書はわれわれが現在知る限りにおけるもっとも早い時期の編集学に関する理論書であり、この 1 冊が中国の編集学および出版学研究の始まりであるといえる。しかし、当時この本の存在を知る者は少なく、反響は小さかった。この著書に対して反応を示した者はわずかでしかなく、編集学・出版学研究はいまだ流れを形成するには至っていなかった。50 年代に入ると、中国では旧ソ連の出版・編集理論の専門書が相次いで翻訳・出版された。たとえば『書籍・雑誌編集学教授大綱』『書籍出版事業の組織と経営』『書籍出版社の業務計画』等 7、8 種類で、それらの書籍は学术界に大きな影響を与え、それによって“編集学”という語がやっと人々に認知されるようになった。一方“出版学”については、1997 年の国家出版局招集の編集出版工作座談会の席上、専門家たちが編集学と出版学の研究を推し進めなければならないと呼びかけ、“出版学”という学問分野の概念を正式にうち出した。これが出版学の体系的研究の幕開けとなったのである。80 年代以降、出版学分野の体系的研究は全面展開の段階に入った。出版学の性質、特徴、研究対象、内容・研究範囲等さまざまな角度から詳細な研究がなされ、出版学研究はようやくひとつの流れを形成するにいたったのである。1983 年末、中国出版工作者協会は第 1 回全国出版科学討論会を招集し、出版学および編集学の第 1 期の研究成果を交換・交流した。1985 年には中国出版科学研究所が設立され、各地の出版局も続々と出版研究部門を設置した。これは出版研究がこの時期に組織化と専門化の段階に突入したことを示している。現在までに、出版学研究はすでに多大な成果を挙げている。“編集学”または“出版学”を題名に冠する理論専門書は 100 種以上、論文数千本、編集・出版等関連の専門の定期刊行物は 20～30 種にのぼり、

また出版・編集等の理論書を専門に出版する出版社には2カ所 中国書籍出版社および書海出版社 があげられる。また編集・出版等の専攻課程が十数カ所の単科大学および総合大学に設置され、学術討論会が毎年開催されるようになり、新聞出版署・編集出版類教材指導グループが主編する、単科・総合大学で使用される編集出版専攻課程用の教材17種はすべて刊行された。これらはすべて、現在出版学が中国において堅実な基礎と良好な形勢を持つことを示すものである。

1. 中国の出版学研究の現状と特徴

ここ20年来の出版学研究は、学术界が諸々の領域で多くの好成績を収め、進展をみせた。中国の出版学研究の現状と特徴についての主な動向を以下にまとめる。

1.1 出版学という学問分野の性質と位置のおおよその確定

出版学がうち出された当初、出版界は出版学という学問の性質をめぐって討論が行われた。ある者は、出版学とは出版業務の実践経験の要約および理論総括の科学であり、人文科学の範疇の分野であるという。またある者は、出版とはひとつの社会文化現象であり、出版学とは文化学の中のひとつであるという。多くの人々は一般に、出版学とは学際的かつ総合的な一学科で、多層的であり、多くの分岐分野と基礎的カテゴリーによって構成される、総合的学問分野であると認識しているようだ。

出版学という分野の位置の決定をめぐって、理論界および教育界には、長期にわたってたくさんの曖昧な概念が存在しており、出版学の理論研究および出版学専攻の人材の教育と養成に対して、多くの疑問と不便をもたらすことになってしまった。であるから、出版学についての科学的かつ正確な位置決定がとりわけ重要だといえるだろう。「中国図書館図書分類法」では、“出版”は“G2”類の“知識と情報の伝達”に分類されている。近頃国家教育委員会が公布した専攻課程目録において、出版学に対して規定を行っている。すなわち出版学とは“文学”類の下、“報道伝達学”の下位分類のひとつ “編集出版”である、としている。これによって、ここ数年来懸案となっていた、教育界における出版編集課程という分野の帰属問題が解決したことになる。そして出版編集関係の専攻課程の設置、人材養成における目標の明確化、学位および専攻課程の管理、出版編集課程の教授・研究および人材育成等にひとつの座標を与えたのである。しかし、教育部門による専攻科目としての位置決定は、ただちに一般的な意味での出版学という学問体系の位置決定をも指しているわけではない。実際、出版学の体系は人文社会科学の内容を含み、かつ自然科学エンジニアリングの応用技術的内容をも含んでいる。総体的にみると出版学は人文社会科学に属するが、その他にも印刷学、印刷工学等の、非社会科学系の分野にまで研究対象が及んでいる。つまり出版学は社会科学を中心に据えた総合的学問分野なのである。出版学という学問分野の位置決定問題に関して、現在中国国内の学术界は、ひとつの基本

的な共通認識に達したということができるだろう。

1.2 出版学の学問理論体系の積極的な構築

“出版学”の概念が打ち出されたことによって、出版学の理論体系の構築についての問題が浮上した。出版学の研究対象とは何か？出版学はどのような要素から構成されなければならないか？どこまでが研究範囲に含まれるのか？出版学が多部門をもち、多階層であり、多岐にわたる学問であることは、学术界の共通認識である。しかし、具体的にどんな要素から、あるいはどのような系統によって構成されるのかについては、諸説紛々である。なかでも代表的な意見のいくつかを以下に挙げてみよう。

(1) 出版学は以下の大きな3つの階層からなる。

“基礎理論と基本的出版知識”：出版学概論，出版管理学，国内外の出版史等を含む。

“応用理論および各部門の出版知識”：編集学，印刷学，発行学を含む。

“出版業務および技術知識の応用”：編集業務，校正業務，版面デザイン等を含む。

(2) 出版分野は4つの部分に分けられる。すなわち“理論出版学”“応用出版学”“歴史出版学”“出版学際学（出版学とその他の分野が結びついて生まれた学際学科，たとえば出版管理学，出版経済学等）”。

(3) 出版とは一種の人類文化的現象であり，ひとつの大きな文化である。よって出版学は“実用出版学”“出版文化学”“出版教育学”の3大部分から構成されなければならない。

(4) 出版学の学科体系は，出版概論，出版管理学，出版経済学，編集学，書籍・雑誌印刷学，図書発行学，読者学，作者学，書籍装丁芸術論，出版史等を含む。

(5) 出版学は“ミクロ出版学”と“マクロ出版学”を含まなければならない。

“ミクロ出版学”は出版業務における内部規則，出版工程中の技術および技能について研究する。たとえば出版経営および管理，出版物研究，読者学，作者学，出版スタッフの教育と養成等である。

“マクロ出版学”とは，出版を社会文化および歴史の発展の大きな流れのなかに投げ入れて考察を加え，他の科学分野と結合させて研究を進める。よって多くの学際学科を生み出すことができる。たとえば出版社会学，出版倫理学，出版文化学，出版伝播学，出版経済学，出版教育学，出版未来学等である。

出版学の学科としての理論体系の構成は，いまだ定説に達していないとはいえ，多くの研究成果によって出版学という学問分野の特殊性がよりいっそう明確になってきた。出版学は発展の途上にある学問であり，“前科学”的状態の科学であり，同時に出版学の学問体系の研究および構築の必要性和，それらが急務であることを認識することができた。

1.3 出版学の基礎概念および基礎範疇の研究の不断の深化

学問の理論体系の組立ては，その基礎概念および基礎範疇と切り離すことができない。

出版学はまだ若い科学であり、現在はまだ“前科学”的狀態にあって、“常態科学”の境地に到達するためには、安定した標準的かつ中核的な概念体系および範疇が示されていないとはならない。目下、出版学理論の研究領域の中核的な概念体系はまだ形成されておらず、標準化されていない概念および範疇の問題を広範囲にわたって抱えている。ここ数年、学术界は基礎概念および範疇の確定に対して、たえ間なく討論および論争を行ってきた。たとえば“出版”概念、“図書”“編集”“編著”“編集主体”“編集客体”等の概念および範疇に対して、系統立った討論と研究を行ってきた。それら多くの研究者のなかで、人民出版社の編集長である林穗芳氏は学識古今に通じ、国内外をカバーし、近年出版学の基礎概念および範疇の研究に尽力して、多大な成果をあげている。1986年には“出版”という概念、出版の語源、出版活動の起源等の問題に対して、詳細で確実な史料と厳密な論理によって、科学的かつ信頼のおける論証を展開している。ここ数年氏は歴史的史実および諸外国との比較を通して、“書籍”“雑誌”“定期刊行物”“著作”“文章記号”等、一連の基礎概念を研究し、多くのレベルの高い論文を発表して、出版学の基礎概念体系の構築および出版学理論の研究の深化に対して確かな基礎を築いた。

1.4 出版学の子分野の活発な研究、そのすばらしい業績

出版学は、多層的で多くの分野に分岐する総合的な学問である。出版学における階層および分岐分野の確定にはさまざまな経路がある。ひとつは、出版業務の工程の角度から、編集学、印刷学、発行学等に分類する方法である。ひとつは出版物の属性から考える方法である。出版物は精神文化と物質商品という二重性をもち、この二重性が出版学研究の分類を決める。精神文化の産物という角度から見れば、その生産と伝播は精神文化産物としての規律に従わなければならない。よって出版文化学、出版伝播学、出版社会学、出版倫理学、出版美学等に分岐する。また、物質商品として見れば、商品生産と流通の市場経済の規律に同様に従うべきであり、よって出版経済学、出版管理学、出版経営学、出版統計学、出版会計学、図書広告学等が派生する。さらに、出版活動と密接に相関している範疇および分野が挙げられる。読者学、作者学、図書学、出版物研究等である。出版学分野の分化は多種多様で、また分岐した分野内においても常にさらに分化し、多くの小分岐分野が派生している。たとえば編集学の下位には書籍編集学、新聞編集学、雑誌編集学、電子出版物編集学、題材選定学、編集技術学等がある。

ここ数年、理論界の出版学の分岐分野に対する研究は活発で、編集学、出版経済学、図書発行学、出版伝播学、出版管理学等の分野の研究は相当の成果を挙げている。とくに編集学の理論研究領域では、多くのすばらしい成績を収めている。1996年末以前に、わが国で出版された編集学理論の著書は65種（台湾・香港・マカオ地域を除く。また編集学の学際分野の著作を含まない）を超え、論文は1000本を数え、また中国編集学会の支持と主唱の下、編集理論研究討論会が毎年開催されている。そのため編集学の理論体系、研究対象と研究内容、および応用理論と技術理論に対する詳細な研究が行われ、多くの問題

において共通認識に達し、ある程度の成熟した基礎理論体系を形成している。このほか、出版経営管理、出版物研究等の研究領域でも一定の成績をあげている。

出版学理論の研究に対して、学界では完全なる理論体系の構築に努力し、研究成果の整備を行う一方、常に出版学の分化を行い、局部的、ミクロ的角度から出版学体系に向き合う努力によって、新しい展開を切り拓いている。出版学理論研究の不断の深化にともなって、出版学の理論体系というビルディングが、まもなく「学問の林」のなかに聳え立つ姿を見ることができよう。

2. 中国の出版学研究の発展の趨勢

21世紀に向かって、中国の出版学の研究は主に次の4つの領域に集中するとみられる。

2.1 出版学の学問体系の構築

学問体系の構築は、常に出版学研究の基本的問題であり、また難関である。現在わが国は出版学をひとつの総合性学問分野として定めた。出版学は多くの子分野と基礎的範疇から構成される。この子分野同士には一定の関連と区分があり、それぞれ独立性をもちながら統一性をも備える。これらの子分野と基礎的範疇が出版学の学問体系というビルディングの煉瓦や瓦となるわけで、出版学の学問体系を確立するための基礎なのである。いま、中国では出版学の子分野に対する研究が盛んで、相当な成果をあげ、なかには理論の深化に達している子分野もみられる。しかし出版学の全体としての研究または総体的研究の展開はまだ十分ではない。全体的な視点からどのようにして、それぞれの子分野内部の構造を研究し、子分野同士の間に関連と区分を分析し、整備し、出版学というひとつの完全な学問体系を構築していくのか、これは学术界の努力を待たねばなるまい。

2.2 出版学の応用的研究

出版学はきわめて実践的で応用性をもった学問分野である。いかにして出版学の理論研究における成果を利用して出版業務を指導していくかは、将来の出版学研究のもうひとつの趨勢となるだろう。中国の出版業に関していえば、編集制度の改革、出版構造の調整、出版流通の新体制の確立、題材選定のレベルの向上、図書品質の向上、著作権の保護、出版関連の法律制度の整備等の問題は、出版学の応用的研究に新たな課題を投げかけているのである。

2.3 出版学の戦略的研究

目前に迫った情報技術と知識経済の時代の到来にそなえ、出版業はすでに現代社会の文化、経済、情報、科学技術の支持体系となっている。知識経済の発展のためには発達した出版業が必要であり、それは必然的に出版業の発展をも促す。そして出版業が発展すれば、

また必然的に知識経済のさらなる発達を促進するのである。次の世紀には、出版学研究も新しい段階を迎えることになる。経営戦略的角度から出版資源の開発とその利用方法を研究し、出版業の継続的発展を可能にし、出版業における最先端技術の開発を進めることによって、出版業をわが国の知識経済の発展の強力な支柱とするのである。

そのためにはまず、出版資源の開発を研究しなければならない。つまり編集者と作家の創作能力、作品の質、題材選定のレベルを向上させ、出版物とその他のメディア間の多元的開発を実現し、出版分野の原生資源（未開発の人材・技術等の意：訳註）と再生資源（既存の人材・技術等の意：訳註）を開拓するのである。

次に、出版資源の合理的な開発とその総合的利用の方法を研究しなければならない。すなわち出版業を、いかにして社会発展、経済成長、社会的要求と協調しながら発展させていくかを研究する。また、出版がもたらす社会的公益性と経済利益を、いかにして同時に生み出しそれぞれの成長を保っていくかを研究しなければならない。

さらに、出版業の先端技術の開発を研究しなければならない。先端技術をいかに使用して、出版業務における科学技術の質を向上させ、出版業の先端技術設備とその技術管理レベルを近代化し、それによって出版産業の構造の調整とレベルの向上を促進させ、業界全体としての労働生産性を高めるかを研究する。また出版業が先端技術をいかに利用してマルチメディア出版物を開発し、電子出版物の品質を向上させるかを研究する。また現代のネットワーク技術を利用して出版業界におけるネットワーク技術の普及と拡大を実現し、出版編集作業の自動化を実現し、出版物発行の自動化およびネットワーク出版物の研究制作・開発等の先端技術を研究しなければならない。

2.4 出版学の参考的研究

出版学の参考的研究とは主に歴史的出版史および国外出版産業の研究である。すなわち国内外出版の歴史上の重要な編集出版活動の経験およびその理念を整理・研究し、また出版活動の文化的・社会的背景、および出版活動が社会に与える影響を研究する。さらに、国外の出版産業の現状と開発を研究し、国外の出版業の産業構造、企業構造、運営方法、管理方式、経営方法等、なかでも、特に出版業の発達した国が有する参考にすべき先端技術、出版企業の管理方式、出版経営の理念、法律制度の整備、および国内出版産業を外来の打撃からいかに保護するか等の経験を研究する。それらの成果をわが国の出版業の改革開放のために奉仕させ、わが国の出版業の繁栄・発展のために理論的、実践的な、参考とすに値する理論・思想および方法論を提供しなければならない。

参考文献

1. 張海潮「出版科学体系研究構想」(『中国出版』1998年第3期)
2. 梁春芳「知識経済形態における出版資源の戦略的開発」(『新聞出版交流』1999年第1期)

3. 楊煥章「編集学研究の意義，状況および見通し」(『曲靖師專学報』1999年第1期)
4. 朱静*「新世紀に向かう出版学研究」(『出版発行研究』1999年第5期)
5. 王華良「わが国の編集学研究の現状と展望」(『編集学刊』1998年第1期)
(筆者：上海出版印刷高等専科学校講師 / 訳：具志あや子)